

バランスのとれた未来のコミュニケーターを育てるために—その工夫と課題 Fostering Well-rounded Future Communicators—Its Devices and Challenges

大池京子

The teacher has been in charge of communication courses at OUC for several years. She has exerted herself to provide more realistic and balanced learning experiences both in impromptu and planned speeches. In particular, to foster future independent, well-rounded communicators, with the help of gradual training, she incorporated peer editing and teacher-led interactive sound check stages in her syllabus this year. The final presentations were significantly transformed although there still remained some issues to be resolved. In this research note, she analyzes her teaching devices in terms of student questionnaire results. Both quantitative and qualitative analyses are presented, and her devices and challenges are discussed.

Key words: self-directed communicator, presentation, individual sound check

1. 研究の目的

この研究は、筆者が行った平成22年度の研究の継続研究である。筆者は、小樽商科大学での、3年間に亘るコミュニケーションクラスでの授業実践を基に、平成22年度、7つの視点から、授業分析を図った。その研究結果と考察から得られた課題を、平成24年度担当のコミュニケーションクラスにおいて反映させ、その効果を検証しようとするものである。

コミュニケーションには、会話相手との間に生まれる、自然発生的なimpromptuと、準備し、計画的に行われるplanned speechの2つが含まれる。よりバランスのとれた、未来のコミュニケーター育成を目指して、筆者はこの2つの要素を講座の柱に立てて、授業を展開している。特に、今年度は、徐々に訓練を積み上げて、未来の自律した、バランスのとれたコミュニケーター達を育てる為に、学生同士での原稿チェックと、教員との個別音声チェックステージを取り入れた。最終プレゼンテーションは、筆者の目から見て大きく変容した。しかし、依然として、解決すべき問題点もいくつか残った。この研究ノートでは、学生による講座終了後のアンケート分析を質的、量的に分析することによって、筆者のどった工夫を検証し、次年度への課題を論じてみたい。

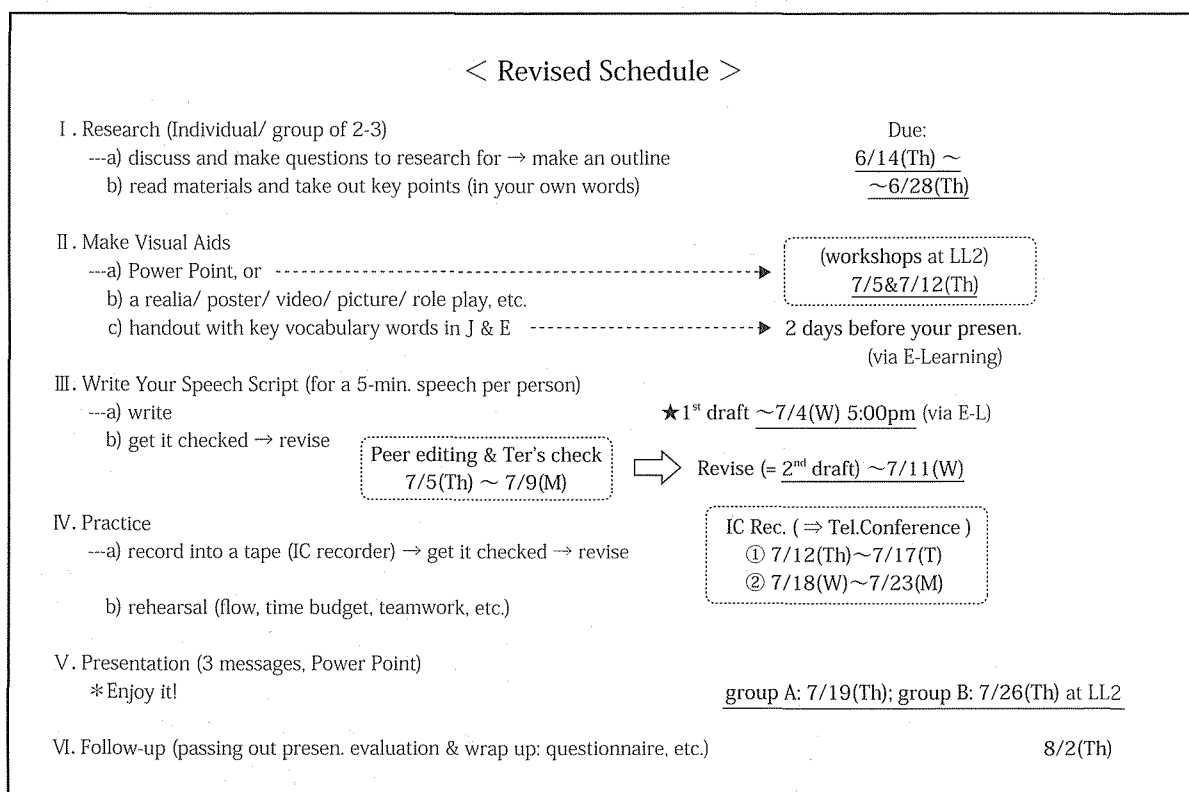
平成22年度の研究の視点は、1. どのようなバランスで講座構成要素の時間配分をすべきか、2. どのような活動を組み合わせると、学生は自信と意識を持った主体的なコミュニケーターに育つのだろうか、3. どのような手法を取れば、教師側の負担を妥当な量にできるのだろうか、4. 節目ごとにProgress CheckとFeedbackを提供することによって、学生のプレゼンテーションの質は効果的に変容するのか、5. より現実に即したPresentationの評価方法はあるのだろうか、6. E-learningを利用して、より密接かつ双方向の学習支援体制を取ることは教員・学生の両方にとり有効であるのか、7. そして、講座全体が有機的に進む時、学生の現在と(近い)将来の英語コミュニケーターとしての成長を促すことができるのだろうか、の7点であった。

II. 研究の手法 (ツール)

平成22年度前期に担当した2クラス、E126B (23名) と E127B (31名) への講座最終時に行った質問紙のデータ集積結果 (以下data Aとする) と、平成24年度前期に担当した2クラス、E130B (28名) と E131B (25名) への質問紙のデータ集積結果 (以下data B) を比較し、考察することとした。ちなみに質問紙は、本学小林教授の作成された質問紙 (1996) をベースとし、それに若干の修正を加え、平成22年度は、30の質問項目で、平成24年度は31の質問項目からなるものを作成して (各項目について5段階評価とコメントを自由記述してもらう様式) 使用した。data A (2クラス合計54人の学生による) と data B (2クラス合計53名中44人の学生による) 回答 (注: 日程の関係からアンケート実施日を講座終了後に設定した為、回答者数が少ない結果となっている) は、Quantitative (量的) と、Qualitative (質的) に分析された。量的分析法としては、各クラスの平均値を算出したものから、さらに2クラス合計の平均値を算出した。質的分析としては、学生からのコメントを誤字脱字の修正以外は、そのまま載せて考察を加えることとした。

III. 講座の展開 (タイムライン)

初講時にシラバスを提示し、学生に講座のたまかな展開を示した。メインテキスト “Speaking in Public” (成美堂) に沿って、前半は即興的な会話練習に意欲的に取り組み、中盤に “Something appealing” と題した1分半のミニスピーチへ移行。後半は、PowerPointを用いた5分間最終プレゼンテーションに向けて、様々なタスクを積み上げていった。補助資料 (Summary writing, Citation, Hints on how to develop research design, Deer editing sheet, etc.) や、“Speaking of Speech” から抜粋した資料 (3 messages, voice inflection, simplifying data, evaluation) と、E-learningや掲示板を駆使して、学生がイメージを湧かせつつ、一連のタスクに取り組めるよう、作業の指示と必要なサポートを続けた。たまかなタイムラインを以下に示し、関連資料を最後に載せることにする。



なお、左記修正日程では、前回同様IC recordingを実施予定であったが、学生が機材の扱いに慣れる時間と、サウンドファイル化して送信、コメントを書いて返信という一連の作業が、どうしても一方通行になりがちな点を改良できないか、と考え、急きよ、教師側から日程の枠を提供して学生に選んで参加してもらい、Individual sound check (Telephone conference) に代替することとした。個別指導の為の貴重な機会ととらえ、1人15分程度の予定で日程を組んだ。修正後の、第2原稿を音読練習してからTel. conferenceに臨むように指示した。こちらでTimeを図り、音読してもらった後に、音声表現を中心に、かいつまんで改善点を助言するという方法を取った。(資料2参照)

以下に、講座終了後の8月2日に行った質問紙によるアンケートから、data Aとdata Bそれぞれの平均値を比較して載せ、また、data Bでのフリーコメントを載せる。(注：一部質問項目に修正を加えている為、data AとBとで若干呼応していない箇所あり)

IV. 学生が選んだリサーチトピック

<E130B クラス>

- World Heritages • Features of Sightseeing Spots in Otaru • iPhone
- The Famous Sayings • Sen to Chihiro no Kamikakushi • The Beatles
- Yacht History • Differences between E-books and Paper books
- The Tourist Industry which Supports Hokkaido Economy • Octopus
- Taruthi & Disaster-stricken Area • 2012 London Olympics—on the British Team
- The Distribution of “Baka” & “Aho” • Why People Believe in a God
- New Local Dishes • AKB48’ s Attraction • Nuclear Power Plants
- Cellphone History • Why Anpanman is Popolar among Children
- Rabbits’ Popularity • Astronomic Shows in 2012 • Little Red Riding Hood
- Attractions of Hokkaido • The Hokkaido Nippon Ham Fighters

<E131B クラス>

- Japanese Food Nowadays • PEANUTS • Power of Onigiri
- The Problem of Applications • Effects of Picture Books • Sleep
- Japanese Comics in Foreign Countries • Japan’ s Food Circumstances
- The Local Currency • How to Recover Japan’ s Composure after Tohoku Disaster
- History of the Beatles • The Presentation Secrets of Steve Jobs
- Why Japanese Badminton Players Can’ t Win in the World • The Eclipse
- Why Nuclear Power Plant Doesn’ t Vanish Away • Bean Sprouts Save the Earth
- Opening Ceremonies of Recent Olympic Games • My Favorite Soccer Players
- The Tyrants in the World History • Okayama • Beijng Zoo

V. 学生からのフィードバックの分析

0) 即興 (impromptu) の学習活動に意欲的に参加できた。平均値：3.86 (平成24年度追加項目)

1	2	3	4	5
全くそう思わない	そう思わない	どちらとも言えない	そう思う	全くそう思う
[コメント]	* [] 内の数字は同様回答をした学生の総数 * / は同様他意見を示す			

大 池 京 子

- 英語が苦手な割には頑張った。 英語はほとんど忘れてしまったからです。
 英語で言葉がすぐに出てくるような練習があればいいと思いました。

(平成22年度) ⇒ (平成24年度)

- 1) プレゼンテーションとは何か、その手順と目的を理解できた。 平均値：4.13 ⇒ 4.22
 段階を追って、最初から最後までしっかりサポートしてもらえたと思います。
 はじめは何をすればいいか全く分からなかったけど、少し分かった。
 この授業で今までやったことは、これからのゼミや将来的な何かに絶対に役に立つと思っています。
- 2) プレゼンテーションの準備は完璧であった。 平均値：2.97 ⇒ 3.19
[2] もう少し原稿を読む練習をした方が良かったと思います。
 少なくともパワーポイントは完璧でした。
 少なくともスライドに関してはまだまだ手直しできた。
 もっと深く調べた方が良かった。 期限を守れず、すみませんでした。
 準備がすぐ終わりました、楽し過ぎて!
- 3) 評価の基準 (story, physical, visual message + thorough research, logical content, clear voice, confidence) は妥当であった。 平均値：3.98 ⇒ 3.90
- 4) 本番では上手くやれたと思う。 平均値：2.85 ⇒ 2.87
[4] 緊張と時間に追われてどうしようもなかった。 / 残念ながら時間内にプレゼンしきれませんでした。 / すごく緊張して、上手くできなかった。 / 緊張しました。
 最初のスピーチより緊張せずはっきりと話せたのが自分でも分かりました。
- 5) 他人のプレゼンテーションや評価が気になった。 平均値：3.72 ⇒ 3.70
 第1グループの人のプレゼンが上手くてあせった。
- 6) 発表時間 (5分) は適切であった。 平均値：3.65 (平成22年度：7～8分) ⇒ 3.87
[2] 一般的には適切なかもしれませんが、自分には短く感じました。 / 短い気がした
- 7) プレゼンテーションに必要な器具や設備は十分であった。 平均値：3.83 ⇒ 3.98
- 8) グループプレゼンテーションでは十分協力し合うことができた。 平均値：3.95 ⇒ 3.93
 *日本人学生達の中になかなか入っていないからです。 Closed.
- 9) Peer Editing (クラスメート同士での 1st draft チェック) の機会は役に立った。
平均値：3.73 (平成24年度追加項目)
- 10) 本番前に原稿の添削について教員から指導を受ける機会があり役に立った。(1st draft+α)
平均値：4.27 ⇒ 4.63
 原稿を添削して頂いたのは有難かった。
 直すところが多過ぎてすみません。
 遅くなってしまって、すみませんでした。
- 11) 本番前に音声表現の添削について指導を受ける機会 (Individual Tel. Confe.) が役に立った。
平均値：3.53 (平成22年度は IC recording) ⇒ 4.50
 自分の原稿を実際に読む機会、聞いてもらう機会はとても重要。
 電話は嫌です。
- 12) Word listのハンドアウトは、発表理解の上で役に立った。 平均値：3.67 ⇒ 4.03
 プレゼンを聞きながら単語の確認は難しい。

バランスのとれた未来のコミュニケーターを育てるために—その工夫と課題
Fostering Well-rounded Future Communicators—Its Devices and Challenges

- 13) E-learningを使っの指示やサポートは役に立った。 平均値：3.88 ⇒ 4.2
- 14) 講義回数に対して、プレゼンテーションに向かう日程配分は妥当であった。 平均値：3.29 ⇒ 3.21
[3] やっぱり日程は苦しかったです。 / 厳しい部分もあったと思います。
 / もっと早くから準備し始めた方が良かった。
- 15) リサーチプレゼンテーションは楽しかった。 平均値：3.82 ⇒ 3.88
[] とても楽しくプレゼンテーションをまたしたいと感じました。
- 16) リサーチプレゼンは自分の英語力を高める上でよい機会を提供してくれた。 平均値：4.12 ⇒ 4.29
[] 有難うございます。
- 17) リサーチプレゼンテーションで英作文力が高まったと思う。 平均値：3.89 ⇒ 4.16
[] 正しいか正しくないかも分からないので、何とも言えません。
- 18) リサーチプレゼンで調音、発音、強勢、イントネーションが強化された。 平均値：3.45 ⇒ 3.65
- 19) リサーチプレゼンテーションで即興での口頭作文能力が強化された。 平均値：3.13 ⇒ 3.43
- 20) リサーチプレゼンテーションで聴解力が強化された。 平均値：3.30 ⇒ 3.65
- 21) リサーチプレゼンで資料の探索、整理、選抜技能が強化された。 平均値：3.57 ⇒ 3.91
[] 分かり易く資料を使い分けて自分の考えを補強する力がつきました。
- 22) リサーチプレゼンテーションで度胸や自信をつけることができた。 平均値：3.55 ⇒ 3.86
[] 初回のスピーチより、ほとんどあがらずにできた。
- 23) リサーチプレゼンテーションで発表した話題について理解が深まった。 平均値：4.23 ⇒ 4.30
[] タコについて、普通は知らないことまで知ることができました。
- 24) リサーチプレゼンで人前で発表することの難しさが実感できた。 平均値：4.56 ⇒ 4.64
- 25) リサーチプレゼンを終えて、人前で発表することに抵抗がなくなった。 平均値：2.87 ⇒ 2.93
- 26) リサーチプレゼンテーションはもうやりたくないと思った。 平均値：2.90 ⇒ 2.33
[] とても楽しく、非常にまたやりたいと思っています。
[] 少し大変だった。
- 27) リサーチプレゼンは大学の英語の授業に導入されるべきだと思う。 平均値：3.78 ⇒ 3.82
- 28) 機会があればまたこうした授業を履修したいと思う。 平均値：3.81 ⇒ 3.90
- 29) 総じて、英語でコミュニケーションを取ることについて、以前より自信がついたと思う。
平均値：3.88 (平成24年度追加項目)
- 30) 今回プレゼンテーションを通して学んだことを、これからの英語学習や似たような機会に活用して
いきたいと思う。 平均値：4.50 ⇒ 4.48

～自由コメント～ E130B

- [12] 授業、とても楽しかったです。 [9] 有難うございました。
- [2] 大学ならではの授業内容だと思いました。 / 高校の時と違い、全て自分でリサーチして、英語で原稿を作り、発表するというのは初めてで、少し大変だった。でも、大学らしい授業だと思うので良かった。
- [2] 今まで英語のプレゼン . をしたことがなかったので、良い経験になりました。授業が英語で行われていたのが少し大変だったけど、楽しかったです。 / 人前でスピーチをする機会があまりなく、しかも英語でスピーチしたのは初めてだったので、とても良い経験になりました。

- [] プレゼンは少しやった事があったけど、英語では勿論初めてだったので、かなり勉強になりました。先生のおかげで英語がさらに好きになりました。
- [] またやりたいです。Tel. confe.も先生が大変じゃなければ次の機会も続けてほしいと思いました。
- [] 最初はプレゼン大変そうで嫌だったけど、英語でプレゼンしたことで、自分でもできるんだと自信がついてよかった! Thank you very much!
- [] 忙しかった分達成感があった。
- [] パワーポイント作成はとても楽しく、凝り過ぎると止まらなくなってしまう。タコについてのプレゼン、非常に楽しみながらすることができました。話題を積み込み過ぎたせいで、時間内にプレゼンできなかったことが心残りです。リベンジしたいです。後期も先生の英語を受講させていただきます。宜しくをお願いします。

～自由コメント～ E131B

- [] リサーチプレゼン . は、とても難しかったけど、特にリサーチして英文を作ることが楽しかったです。他人のプレゼンをきいて、また自分の発表を振り返ってみて、相手に伝えることの難しさや大変さを改めて実感しました。この授業でのプレゼン . は、とても良い経験になりました。また機会があれば、リサーチプレゼン . に挑戦してみたいです!
- [] 遅れたりしてしまったのに、電話で丁寧な対応をして頂いて本当に有難うございました。プレゼン . はとても大変でしたが、英語力を高める良い機会になったと思います。
- [] スピーチは楽しかったです。時間を上手く使うことができなくて、あまり上手く準備が完璧にできなかったのが悔いが少し悔いが残ります。Tel. Confe.の指定時間が少し厳しかったかなと思います。バイトとかしていると、夜になかなか家にいられなかったりするので、時間帯も前もって相談できれば良かったです。でも、友達もこのクラスで増えたし、楽しかったです。また機会があれば宜しくをお願いします。
- [] この授業はとてもためになり楽しかったです。
- [] プレゼンはとても大変でしたが、確実に自分の力になりました。スピーチをやってからプレゼンをやったので、自分の成長を感じることができました (ちょっと緊張が少なくなったetc.) 本番はあまり上手いかず悔いが残りましたが、楽しかったです!本当にお世話になりました。先生の授業と先生だいすきです。
- [] 先生の英語プレゼン授業は素晴らしいです。
- [] 英語でのプレゼン (というかプレゼン自体) が初めてだったのでとても不安でしたが、最後までやり遂げることができました。途中ぐだぐだでしたが、見放さないでくれてありがとうございました。もっとプレゼン . の機会が増えると思うので、今回のことを活かしていければなあと思います。
- [] 英語で、しかも人前で話すことの難しさを実感する授業でした。その分、どうしたら相手に分かり易く伝えられるかを学ぶことができたと思います。

VI. 考察と次年度へ向けて

学生からのフィードバックを基に、この継続研究の焦点である、講座の課題と今回の改善ポイントに考察を加え、さらなる改善の方途を探りたい。

(1)講座構成要素の時間配分については、今年度、プレゼンテーションの具体的なガイドラインを示

す時期が5月中旬に大幅にずれ込んでしまった。既に、先行研究で、4月の早い時期にスタートを切る必要があると結論していることを考えると、大きな反省点である。Learning community作りや学生のmotivationを引き出す授業のflow作りといった大切な要素を踏まえながらも、学生が、より自主的に学習活動に取り組めるように、学習活動の厳選と、ゆとりを持った講座展開が必須である。また、発表時間は6分程度保証したい。総じて、講座で立てた柱である、impromptuからshort speech, final presentationへの流れは学生の意識を徐々に高め、最終プレゼンテーションに向けて、着実に変容を促しているようである。(質問1, 2, 14への回答参照)

(2)自信と目的意識的なコミュニケーターの育成に関しては、先行研究で得られた点を考慮し、今年度はPeer supportの機会を積極的に活用した。コメント入りのPeer evaluation sheetを早めに発表者に渡したり、現行の、発表後のQ&Aタイムを工夫した。さらに、Peer editing stageを取り入れ、Individual sound checkを工夫した。Peer editing では、3人一組で1st draftを回覧して互いにコメントを寄せ合うことで、他者の作業への取り組みを見る機会となり、それはまた自分の取り組みへのさらなる促しになっていたようである。また、Tele. Conferenceによる個別音声チェックは、日程の設定がやや難しく、学生側に授業外の時間帯でのcommitmentを要求する形となった。また、自宅電話使用を奨励したが、学生によっては携帯電話の使用となり、電話料金の負担が発生し、次年度の課題となった。しかし、Individual sound checkを経験した学生は、音声表現を中心に、明らかにfinal performanceにおいて、大きな質の変容が見られた。即ち、声のtone, phrasing, inflection, volume, stress, pronunciationに明らかな改善が見られた。その結果、Listenerである他学生にとっても、分かり易いpresentationになっていたと言える。総じて、これらの工夫が学生の自信と自律を促したことが窺える。(質問2, 4, 5, 9, 11, 18, 20, 22, 24, 25, 26への回答参照)

次に(3)(4)教員側の負担として、Speech原稿の添削と、Individual sound checkが大きかった。これは即ち、どのphaseで学生が壁にぶつかり、どのように教師側がサポートしていくことで、その壁を乗り越えさせる手助けをできるか、という問いでもあろう。講座展開中に気づいた3つの壁は、A) research questions から1st draft writingへのステップ、B) 1st draftから2nd draftへの修正のステップ、そして、C) researcherからpresenter へのシフトを図るrehearsalステージであった。対策として、その都度サポート資料を提供したり、関連活動を入れてサポートを図るようにした。とりわけ、今年度取り入れたTele. conferenceは、IC recordingよりも着実に学生に音声表現への個別指導ができるのであるが、その為にtotalで約11時間程度の時間を費やしたことから、さらに効率的な方法の工夫が次年度の課題として残った。また、筆者自身、どこまでの音声表現を目指させるべきなのか、“国際言語としての英語：Globish”という概念に視点を向けた方が良いのか、途中少し悩みながら進めていた。今後の課題である。いずれにしても、audienceを意識し、メッセージを如何に分かり易く伝えようかと心を配る中で、発表者は、着実にもう一歩コミュニケーターとして成長していったようである。(質問10, 11, 17, 18への回答参照)

(5)Evaluation sheetについては、例年のシンプルなフォームに、今年度は少し手を加え、合計ポイントをとらえ易くした。例年言語センタースタッフのご協力を頂き、プレゼンテーションをビデオ撮影し、DVD化して頂いている。それを補助的に評価に組み込むことも考慮したが、データ加工の時間の関係で、難しいところである。より実用的なPresentation評価法の模索は、来年度も継続課題である。なお、今年度は、筆者が受講生と共に、発表当日の役割分担をして、学生がより積極的に参加してのpresentation運営を図った。time keeper, camera crew, PC (USBメモリ) 担当、word list配布担当、

listener's sheet担当等を分担し、発表中の円滑な評価を試みた。また、発表までの取り組みの観察も評価に加えて行った。補足点として、Power PointのUSBメモリデータは、予め教師側で一か所に集めておいた方が当日の準備がスムーズであったと思われる。また、前年度課題であった、Computer Laboratoryでコンピューター操作の指示やPower Point作成法を伝える際の英語による指導は、今年度しっかりと英語の量を増やし、学生へのInputに変えたことを補足したい。(質問3, 5への回答参照)

(6)E-learningの活用は、今年度も講座のライフラインであった。授業内での周知に加え、各段階で課題の達成状況を確認したり、学生からの質問にタイムリーに対応し、次のステップに向けガイドする学習支援ツールとして、大変役立った。来年度も継続したい。(質問13への回答参照)

最後に、(7)バランス良くコミュニケーション力を備えた、未来の英語コミュニケーターを育てる講座作りに関して言えば、総じて、学生はこのPresentationというprojectを通じて、相手に分かり易くメッセージを伝えることの難しさや、やりがい等、いろいろな気づきをしていた。(質問4, 23, 24, 25, 30回答参照)。

次年度から、本学ではコミュニケーションクラスのシラバスを、より系統的に展開していく計画であると伺っている。今年度までの成果と改善点を、さらに次年度以降に活かし、学生が積極的に英語での表現活動に関わりながら、自信を育て、近い将来経験するであろう英語での会話やspeech, presentation等に向け、自律したcommunicatorに育てていくよう、さらに豊かなLearning experienceを提供し続けていきたい。

参 考 文 献

- Deaux, G. R., Shimozaki, M. & Suzuki, Y. (2003). *発信する大学英語: Activating College English-Introductory Course*. Tokyo: Ikubundo.
- Fujita, R., Yamagata, A. & S. Takenaka. (2009). 学生の意識変化に見る英語プレゼンテーション授業の有用性. *東京経済大学人文自然科学論集 (128)*, 35-53.
- Harrington, D. & LeBeau, C. (1996). *Speaking of Speech*. Tokyo: Macmillan Language House.
- Kobayashi, T. (1996). 大学一般教養英語におけるリサーチプレゼンテーション導入の試み—小樽商科大学英語IIでの実践報告—. *Language studies: 言語センター広報*. 4:41-80.
- Michimoto, Y. & Nakamura, M. (2011-3) World English における intelligibility の考察. *太成学院大学紀要* 13, 127-130.
- Nakaya, M. & Pak, J. (2010) *Speaking in Public -- プレゼンテーションのための基礎英語*. Tokyo: Seibido.
- Neff, P. (2007). The Roles of Anxiety and Motivation in Language Learner Task Performance. *言語文化*. 10(1). 23-42.

資料 1. Self/ Peer Editing Sheet

E _____ B _____ date _____

Self & Peer Editing Sheet

_____ by _____ & _____

〈Presentation manuscript〉	Self		Peer		Peer	
	OK	Need work	OK	Need work	OK	Need work
1) Organization & Content						
a. Thesis, T.S., Supporting ideas, Concluding sntnc.	_____	_____	_____	_____	_____	_____
b. Transition signals	_____	_____	_____	_____	_____	_____
c. Unity (no irrelevant sntnc.)?	_____	_____	_____	_____	_____	_____
d. Clear & interesting content?	_____	_____	_____	_____	_____	_____
2) Writing & Grammar/mechanics						
e.g. Clear sentences w/ S & V, S.V. agreement, Verb tense, Conjunctions	_____	_____	_____	_____	_____	_____
@ Tell/write comments (Be positive & advise..)	_____					

資料 2. Individual Sound Check Points (口頭でアドバイスのポイント)

- 声のトーン：先ず口を大きく開き、声に思い（メッセージ）を乗せるよう心がけましょう。
 ～内容で事実の列記箇所が多いので、意味のまとまりごとに抑揚（上下）や間合い（ポーズ）を意識すると、リスナーにさらに伝わり易くなります。
- voice volumeはさらに大きく120%に。
 ～息を大きく吸い、口を大きく開き息を前に飛ばすことで。
- 1 • phrasing (= 述部、主部等の区切り) を意識し、全体に、もう少しゆっくりめに語ろう!
 ～リスナーが音声メッセージをプロセスし、理解しながらついてこれるように。
- 2 • pausing (= 意味のまとまりごとのphrasingのあと、意識して少し間(ま)をおくようにしましょう!
- 3 • key wordsにさらにstress / stretchを置き、強調するとリスナーに伝わり易くなります。

その他 • 個々の発音/アクセントの位置チェックと練習を～ key wordsを中心に
 • Grammar / 構成 等

～さあ、あとは練習。大きく深呼吸し、リラックス。Good luck!

E B

ID # _____ your name _____

order (#) _____ presenter's name _____
(presen.)

Title _____

Evaluation Sheet for the Final Performance

- Evaluate the speaker on a scale of 1 to 5 with 5 being the highest and 1 the lowest.
- Give the speaker your evaluation sheet at the end of the speech.

a. Physical Message (Circle the Number)

	Lowest			Highest	
Posture (姿勢)	1	2	3	4	5
Eye Contact	1	2	3	4	5
Gestures	1	2	3	4	5
Voice Inflection (スチズ、スチフ、ポーズ)	1	2	3	4	5

What did the speaker do that you liked best: _____

b. Story Message (Circle the Number)

	Lowest			Highest	
Introduction (第1パラグラフ)	1	2	3	4	5
Body and Evidence (展開と証拠)	1	2	3	4	5
Transitions and Sequencers	1	2	3	4	5
Conclusion (結論展開の方向、締めを示す語句)	1	2	3	4	5

What was best about the speaker's story message: _____

c. Visual Message (Circle the Number)

	Lowest			Highest	
Visual Aids Quality (PPT等の質)	1	2	3	4	5
Use of Visuals (効果的の使用)	1	2	3	4	5

Which visual did you like best: _____

< Comments, Qs, Advice >

Thank you ~!~